

観峰書道

習字手本付録

Kampo School of
Calligraphy

発行日 2010 年 8 月

発行者 原田由利

発行所 観峰文化センター

住所 〒606-8334

京都市左京区岡崎

南御所町 40-20

© 原田詳経 無断転載を禁ず

筆者

原田 観 峰

1911~1995

・正しい文字美しい文字愛の習字の父
・正統書法を伝える書道教範の筆者
・美しい心と伝統の妙技伝承者



書塾出版

www.kampo.co.jp

「鑑賞の心得」

書道は真に芸術的価値の深遠なものであり、深遠であるほど鑑賞眼の養成が重要な意義を持つことになる。

文字の形は千変万化して、書く人によつて一人一人ちがつた趣の書ができる。よい字とまずい字、あるいは味のある書とそうでないものが理解できるようにするためには、よい作品を多く見て、どんな書がよいかを見分ける力、つまり鑑賞力を養うことが大切である。

鑑賞学習は、ともすればおろそかになりがちであるが、「技法はその人の目の高さ以上には進まない」ということである。手指の形も筆の種類も皆同じなのに、なぜ優れた書き手と劣る書き手が生ずるか、実は同じ環境のもとに努力を続けても、各自の鑑賞力に差があるからである。

常により高い作品に目を触れては、「良い自だなあ。すばらしい書だ」と感動し、それに近づこうと努力錬磨して少しずつ向上していく。この刺激発奮の好資料に恵まれない人は、自己満足に終わって向上は止まってしまう。座敷などに掲げられた扁額や条幅のある環境が無意識のうちに感化を与え、審美感の素養となるのである。

書の技が上達するにつれて、鑑賞力も必然的に備わってくるものである。名家の書を鑑賞するにしても、練習に相当の苦心を積んだ人でなければ、なかなか真の妙趣はなかなか分かるものではない。

作品から伝わってくる品格は、鑑賞すべき内容としてもつとも重要なものである。

よい字を書くには、良い字を多く見るということである。そして書のもつ千差万様の書風、さらには繊細、あるいは力強い風韻を感受して、それを記憶することが大切である。脳裏に深く焼き付けておくと、多少形は違つても、作品に応じて書き表すことができるようになる。

いかに「手習い」が徹底しても、眼識が伴わない技だけの向上には限界があり、技にばかり頼つていては、自ずと限界がある。

見る人の眼識如何によつては、書家と称せられる人の書でも鑑賞的価値なしと言われることもあり、又あまり手習いをしたことのない名士の書でも、鑑賞的価値ありと言われることもある。

見る人の主観的鑑賞価値を定めるには、幾多の経験を積み、多年の修練を経ることによつて体得される特殊の能力を必要とする。

鑑賞はいわゆる「目習い」である。